



TITLE:

1950-60年代のシンガポールにおける華語文芸世界とマレー語文芸世界との交差

AUTHOR(S):

篠崎, 香織

CITATION:

篠崎, 香織. 1950-60年代のシンガポールにおける華語文芸世界とマレー語文芸世界との交差. CIRAS discussion paper No.92: 『カラム』の時代 XI --マレー・イスラム世界の女性と近代 2020, 92: 61-74

ISSUE DATE:

2020-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_92_61

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

1950～60年代のシンガポールにおける 華語文芸世界とマレー語文芸世界との交差

篠崎 香織

1. 開かれたシンガポールの文芸空間

1950年代から60年代にかけて、シンガポールの華人社会でマレー語学習ブームが起こった。それを支えたのは、華語文芸世界の中で育ちながらマレー語を習得した華人知識人と、「社会のための芸術」を掲げて活動したマレー人知識人とが交差した空間であった。

シンガポールで創刊し、シンガポールを含むマラヤで多くの発行部数を誇った『南洋商報』(*Nanyang Siang Pau*)と『星洲日報』(*Sin Chew Jit Poh*)は、1960年以降、マラヤおよびインドネシアのマレー語文学作品やその作家を紹介したり、華語による説明を付したマレー語のテキストを掲載したりする特集欄を毎週掲載した。また、華人がシンガポールに創設し経営した世界書局や上海書局などの書店・出版社から、マレー語の学習を促進し、マレー語の文学作品やその作家を紹介する月刊誌が刊行された。

マレー語による文芸活動はマレー人のみに限られた言語空間ではなかった。華語文芸世界のなかで育ちながらマレー語を習得した華人知識人は、華語で書かれた書籍や新聞・雑誌を通じてマラヤおよびインドネシアにおけるマレー語の文芸活動の歴史やその動向を積極的に紹介していた。こうした華人知識人の中には、マレー語で論説や文芸作品を表したりマレー語の雑誌を創刊したりする者もいた。それらの論説がマレー語日刊紙『ウトゥサン・ムラユ』(*Utusan Melayu*)に掲載されることもあり、また、ジャウイの読み書きを習得した華人も少なくなかった。1959年に上海書局からマレー語・華語の辞書『簡明マレー語・華語辞典』(簡明馬華辞典)を出版し、『南洋商報』のマレー語特集版を初期に担当したりム・ホアンプン(Lim Huan Boon/林煥文)¹⁾や、『マレー語略語辞典』(*Kamus*

Singkatan Bahasa Melayu/馬來語略語辞典、1969年)や『マレーシア語大辞典』(*Kamus Umum Bahasa Malaysia*/馬來語大辞典、1972年)など12種類のマレー語・華語辞書を出版して『南洋商報』のマレー語特集版をリムから引き継いだヤン・クイイー(Yang Quee Yee/楊貴誼)²⁾は、ジャウイの読み書きを習得していた華人知識人である。ヤンはジャウイで書かれたマレー語雑誌である『カラム』と『マスティカ』を全号所有している³⁾。

1950年代から1960年代にかけてのシンガポールの華語文芸世界はシンガポールのみに閉じられた空間ではなかった。シンガポールの華語文芸世界は第二次世界大戦以前に中国の知識人を多数引き付けながら発展した。中等教育や高等教育を求めてマラヤの他の地域からシンガポールに移った者も多かった。オランダ領東インド(インドネシア)の出身で、インドネシアやマラヤの華語学校で学び、マレー語と華語を操るインドネシアの華人も、シンガポールにおける華語文芸世界とマレー語文芸世界の交差を取り持つうえで重要な役割を担った。

この時期のシンガポールにおける華人のマレー語学習ブームを扱った研究に、[莊 2002; Chong 2003; 周 2014; 吳 2016]などがある。これらはいずれも、マ

も華語表記が一般的となっている人物は華語表記とする。

2) 楊夷、馬豈、東青、欧浪華、Titian Syahなどのペンネームでも執筆した。クアラルンプールのマレーシア華人社会研究センター(Centre for Malaysian Chinese Studies/華社研究中心)にヤン・クイイー、チャン・ミュウワー寄贈所保管室(楊貴誼・陳妙華寄贈書保管室)が、マレーシア国民大学マレー世界・文明研究所(Institute of the Malay World and Civilizations/Institut Alam dan Tamadun Melayu)にヤン・クイイー特別コレクション(Koleksi Khas Yang Quee Yee)がある。

3) ヤンは、『カラム』のバックナンバーを求めてカラム社を訪ねエドルスに面会したり、『マスティカ』のバックナンバーを求めてウトゥサン・ムラユ社を訪ねたりしていたが、これら出版社にはバックナンバーがほとんどなかった。ヤンはシンガポールのウッドランドの出入国管理局ビル近くにあった貸本屋で『カラム』と『マスティカ』を偶然見つけた。この貸本屋に何度か通っているうちに、貸本屋の店主は店を畳むからとヤンにバックナンバーを譲り、ヤンは『カラム』と『マスティカ』を全号揃えることができた[Yang 2006:505-508]。

1) 本稿では華人の名前を表記するにあたり、以下のような原則を取る。マラヤの華人に関しては、アルファベット表記が分かる場合その発音をカタカナで表記し、アルファベット表記が不明である者に関しては華語で表記する。中国の華人で、日本で

レー語学習ブームが華語教育を受けた華人、とりわけ南洋大学生を中心に展開したことに着目し、中国的な文化の維持を重視したとみなされがちな南洋大学の再評価を図っている。他方でこれらの研究は、マレー語学習ブームがあたかもマラヤという領域のみで完結した動きであるにとらえており、国境を越えたインドネシアとのつながりについてはあまり触れていない。またこれらの研究は、マレー語の読み書きができる華人知識人とマレー人知識人との交差を指摘しているものの、マレー語の位置づけをめぐるマレー人社会に多様な構想が存在したことにほとんど触れていない。

本稿は、1950年代から1960年代のシンガポールにおける華語文芸世界とマレー語文芸世界との交差を、主に華語文芸世界の側からとらえる。第二次世界大戦以前におけるシンガポールの華語文芸世界の形成を整理したうえで、1950年代から1960年代にシンガポールを拠点としてマレー語の文芸活動に参加した華人知識人の背景を整理するとともに、これらの華人知識人と交差したマレー人知識人の背景も明らかにする。

2. 東南アジア華語文芸活動の中心地 シンガポール

2.1 華語新聞の創刊

1816年以降にイギリスの自由港として開発されたシンガポールは、19世紀から20世紀にかけてマラヤとオランダ領東インドで農産物と鉱産物の開発が進むなかで、マラヤとオランダ領東インドから農産物と鉱産物を輸入し、それをイギリスをはじめとするヨーロッパやアメリカに輸出する一大交易センターとなった⁴⁾。シンガポールはマラッカ海峡の域内外をつなぐ航路の結節点となり、マラッカ海峡を渡航する人たちが往来する場となった。とりわけマラッカ海峡に仕事を求めて中国から渡航する者の数は多く、また、これらの労働力を管理し、マラッカ海峡地域で鉱業や農業、貿易業、小売業、運輸業などの事業を展開する華人実業家の多くもシンガポールに拠点を置いた。

シンガポールは情報の拠点としての機能も果たした。1824年にシンガポールの商業コミュニティ向けに英語新聞『シンガポール・クロニクル』(*Singapore Chronicle*) が刊行された。1845年に創刊された『ストレイツ・タイムズ』(*Straits Times*) は、海峡植民地の

みならず、マラヤ、フィリピン、ジャワ、スマトラ、ボルネオ、シャム、フランス領インドシナでも流通した[Write and Cartwright 1908: 156]。1881年には華語新聞『叻報』(*Lat Pau*)⁵⁾ が創刊された。マラッカの富裕な華人一族を出自として香港上海銀行で買弁をしていたシー・イウレイ (See Ewe Lay/薛有礼, 1851-1906) が創刊した同紙は、中国やイギリス、マラッカ海峡地域などの政治や時事情報、事件を伝えるとともに、企業・商品の広告や外国為替、域内外を結ぶ船舶の時刻表などを掲載していた。

19世紀末から20世紀初頭にかけて華人知識人による雑誌や新聞の創刊が相次いだ。これらの雑誌や新聞では社会の啓蒙や政治思想の普及が強く意識されていた。イギリスで医学を修めてシンガポールに戻り、1895年に立法参事会の議員となったリム・ブンケン (Lim Boon Keng/林文慶)⁶⁾ などが、1897年に英語雑誌『海峡華人雑誌』(*Straits Chinese Magazine*)⁷⁾ を創刊した。リムは華語新聞も創刊しており、清朝の改革を志向し康有為を支援したクー・セオックワン (Khoo Seok Wan/邱菽園)⁸⁾ とともに1898年に『天南新報』(*Thien Nan Shin Pao*)⁹⁾ を、また、独自に1899年に『日新報』(*Jit Sin Pau*)¹⁰⁾ をそれぞれ創刊した。1905年には

5) 『叻報』は1932年まで刊行された。詳細は[Chen 1967]を参照。

6) 1869年にシンガポールに生まれる。祖父と父は共に酒精・アヘン専売業者の下で働いていた。ブンケンも福建系の廟に併設されている学校から政府系の学校に移って以降、英語教育を受けた。1887年に女王奨学金を得てエディンバラ大学に留学し、1893年にシンガポールに戻った。

7) 女王奨学金でイギリスに留学していたシンガポールのソン・オンシアン (Song Ong Siang/宋旺相) やペナンのユーラシアン (欧亜混血者) のロック (P. V. Locke)、ゴー・リエントウック (Gnoh Lean Tuck/呉連徳) とともに創刊した季刊雑誌。雑誌の販売人は、マラヤ、バタヴィア、サラワク、サイゴン、バンコク、横浜、ロンドン、エディンバラ、ケンブリッジなどに所在していた[Tan 2011: 33]。

8) 1874年に福建省海澄県で生まれる。1881年にシンガポールの有力米商人であった父のもとに移った。1888年に父母と共に海澄県に戻り、1894年に科挙試験に合格して挙人となったが、1895年の会試に失敗して1896年にシンガポールに再度渡った。間もなく父が逝去し、葬儀を行うため中国に戻った際に、清朝の改革を求める活動家たちと知り合った。1897年にシンガポールに帰った後、清朝の改革を求める運動を展開した。父親の遺産を元手に始めた事業は破産したが、1910年代から20年代にかけてシンガポールにおける文芸・教育活動で名を残した[柯 1995: 102]。

9) 1905年に停刊。

10) 『日新報』は1890年に創刊された『星報』(*Sing Po*) を引き継ぐかたちで創刊された。『星報』の創刊者はリン・ヘンナン (Lin Heng Nan/林衡南) とされる。リンはマレー語の知識があり、華語・マレー語の辞書(『通夷新語』、『華夷通語』)を編纂した。のちにリム・ブンケンの義父となるウォン・ナイシオン (Wong Nai Siong/黄乃裳) が主筆を務めた[Chen 1967: 54-58]。ウォンは『日新報』でも主筆を務めた。『日新報』は1901年に停刊した。

4) アジア交易におけるシンガポールの地位については[Huff 1994]を参照。

『南洋総匯報』(*Union Times*)¹¹⁾が創刊され、清朝の改革を求めた『香港商報』から徐勤や伍憲子が主筆として招かれた。清朝の改革を求めたこれらの華語新聞に対し、清朝の打倒を掲げた孫文らの革命事業を支持する華語新聞も創刊された。同盟会シンガポール支部の中心であったタン・チョーラム(Tan Chor Lam/陳楚南)とテオ・インホック(Teo Eng Hock/張永福)が、1904年に『閩南日報』(*Thoe Lam Jit Poh*)を、1907年に『中興日報』(*Chong Shing Yit Pao*)をそれぞれ創刊した。

しかしこれらの華語新聞の発行部数はそれほど多くなく、社会的な影響は限定的であったことが指摘されている。1910年時点の発行部数は『叻報』が550部で[SSBB 1910: GG2]、シンガポールで最大の発行部数を誇り影響力が最も大きいとされた『南洋総匯報』[Chen 1957: 93]でも1,060部であった[SSBB 1910: GG2]。華語新聞が多く読者を得ようになるのは1910年代以降であり、その背景には華語学校の増加があった。それは華語書店・出版社がシンガポールに設立される背景ともなった。

2.2 華語学校の増大と華語による文芸空間の拡大

マラヤの華人社会には、中国の古典を教材として漢字の読み書きや文章技法、書簡作成などを中国語方言で教授する私塾が1810年代から存在した。こうした伝統的な教育に対して、算数や地理、歴史、理科などを教授する近代的な教育制度が1902年に清朝で導入され、それに沿ってカリキュラムを組み、華語を教授言語とする学校がマラヤでも設立された。1904年にペナンに中華学校が設立されて以降、1910年までにシンガポール、クアラルンプール、イポー、マラッカなどで近代的な華語学校が設立された[Tan 1997: 12-13]。その数は1910年代以降急増した。例えばシンガポールでは、新設された華語小学校の数は1900年代に8校、1910年代に33校、1920年代に92校、1930年代に123校と増加していった[鄭 1998: 161-164]。1919年にはタン・カーキー(Tan Kah Kee/陳嘉庚)¹²⁾がマラ

ヤで最初中等教育機関である南洋華僑中学を設立した。マラヤ全体では1937年までに華語学校の数が1,180校に達し、華語学校で学ぶ学生数は9万4,516人に及んだ[鄭 1998: 296-297]。

マラヤにおける華語学校の増加とそこで学ぶ生徒数の増加は、シンガポールにおける華語書店・出版社の設立につながった。当初は中国の出版社の支店として設立された。1897年に上海で設立された商務印書館は、1915年に初の海外支店をシンガポールに置いた[周星衛基金 2016: 33-34]。また、商務印書館から独立した陸費逵が1912年に上海で設立した中華書局も、1914年にシンガポールに代理店を置き、1923年に支店を開設した[周星衛基金 2016: 43-46]。商務印書館と中華書局は中国で小中学校の教科書を出版しており、それらの教科書に対するマラヤでの需要の高まりを受けてシンガポールに支店を設置するに至った。

1920年代には華語書店・出版業界に新たな参加者が現れた。上海書局と世界書局である。上海書局は陳岳書が1925年に設立し、世界書局はチョウ・シンチュー(Chou Sing Chu/周星衛)が1924年に設立した正興公司を前身として1934年に設立した[周星衛基金 2016: 53-54; 63-64]。両書店は、華語学校向けの教科書の出版・販売に参入するとともに、中国で出版された文学作品の輸入・販売で事業を発展させた。1915年以降、中国では、科学や民主主義を重視し、伝統や形式にとらわれず自らの思想や感情を口語体で表現する新文学の確立を目指す新文化運動が進展し、北京や上海を中心に出版活動が活発化した。マラヤでもそれらの出版物を求める読者が増え、上海書局と世界書局はここに商機を見出した。両書店はさらに東南アジア各地に販路を拡大した。上海書局はクアラルンプールやジャカルタ、スラバヤなどに支店を開き、北ボルネオ、サラワク、シャム、ビルマ、ベトナム、カンボジア、フィリピンの主要な都市に代理店を置いた[周星衛基金 2016: 54]。世界書局は、系列の大衆書局の支店や代理店をクアラルンプール、ペナン、ジャカルタ、スラバヤなどに開いた[周星衛基金 2016: 64]。

11) 『南洋総匯報』は、資金難に陥った『閩南日報』に外部の出資者が合流するかたちで創刊された。外部の出資者たちは革命を支持する論調に反対したため、テオとタンは『南洋総匯報』を離れて『中興日報』を創刊した[Chen 1967: 86]。『南洋総匯報』は日本占領期まで刊行され、第二次世界大戦後に『星洲日報』と合併して復刊されたが、1946年12月に停刊した。

12) 1874年、福建省同安県集美村生まれ。シンガポールで事業を興した富裕な商人を父に持つ。1890年にシンガポールに移り、父親が興した事業をもとに、パイナップルやゴム、米などのプランテーション経営や食品加工事業、海運業、新聞業などで財を成した。1900年代半ば以降、シンガポールの福建人社会にお

いて指導的な役割を担うようになり、辛亥革命後に福建保安会を設立して福建革命軍政府を支援した。1913年に集美村に学校を設立し、1921年に厦門大学を設立した。1930年代後半以降は、シンガポールの福建人社会での影響力を背景に、華人社会を広く動員する活動も展開した。1938年に設立された南洋華僑祖国難民募金支援総会の会長。1950年にシンガポールを去り、中華人民共和国で全国政経委員や人民代表大会執行委員、華僑事務委員会委員、全国婦僑連合会主席などを務めた[周 1995: 456-457; 市川 1984; Yong 2014: 129-177]。

新しい文学を志向する動きは新聞でも展開された。1919年10月に創刊された『新国民日報』(*Sin Kuo Min Press*)¹³⁾は、文学作品を掲載した特集版『新国民雑誌』を創刊し、新文学の流れをくむ作品が掲載された。マラヤを舞台とする随筆や論考、小説も寄せられるようになり、マラヤ華語文学(馬華文学)の出発点となった[方 1986: 1-25]。

1920年代には、多数の部数を誇り現在まで続く『南洋商報』と『星洲日報』が創刊された¹⁴⁾。『南洋商報』は1923年にタン・カーキーが創刊し、『星洲日報』は1929年にオー・ブンホー(Aw Boon Haw/胡文虎)¹⁵⁾が創刊した。タンもオーも、新聞に掲載する広告からの収入に可能性を見出し、また、自社製品の広告を掲載するために、新聞を創刊した[沈 2013: 80-81]。広告を募るには多くの人に新聞が読まれる必要があり、そのために両紙は中国やマラヤ、世界のニュースや経済状況など最新の時事を日々伝えるとともに、文学や娯楽、生活などに特化した特集版を付して多様な情報を提供した[崔 1993: 30-32]。両紙は1920年代から1960年代にかけてシンガポールのみならずマラヤ全体で最も広く読まれた華語新聞となった[王 1998: 107]。1939年の時点で『南洋商報』の発行部数は朝刊と夕刊を合わせて4万4,000部であり、『星洲日報』の発行部数は朝刊と夕刊を合わせて5万部であった[沈 2013: 81]¹⁶⁾。同年の『ストレイツ・タイムズ』の発行部数1万5,000部[Straits Times 1953.1.18]と比べると、両紙が多く発行部数を誇っていたことがわかる。

13) 1914年に孫文と国民党員がシンガポールで創刊し、1919年8月に停刊した『国民日報』を前身とする。

14) マレーシアでは現在でも『星洲日報』と『南洋商報』が発行されている。シンガポールでは両紙は1983年に合併して『聯合早報』(*Lianhe Zaobao*)および『聯合晩報』(*Lianhe Wanbao*)として発行されている。

15) 1882年ヤンゴン生まれ。福建省永定県金豊里中川郷をルーツとする客家人。父親オー・チューキン(Aw Chu Kin/胡子欽)が福建省からヤンゴンに移住し、漢方薬店の永安堂を1870年代に開業し、鎮痛・消炎に効く軟膏を開発した。オー・ブンホーは1892年から1896年に父親とともに福建省永定県の出身村に戻り、4年間私塾で教育を受けた。1908年に父親が亡くなり、弟のオー・ブンパー(胡文豹/Aw Boon Par)とともに永安堂を引き継ぎ、父親が開発した軟膏をタイガーバームとして販売した。1921年にバンコクに、1923年にシンガポールに永安堂の支店を開き、1926年以降は永安堂の拠点をヤンゴンからシンガポールに移した。1929年に上海と香港に永安堂の支店を開設して以降、中国各地に支店を開設するとともに、ベナン、ジャカルタ、メダン、スラバヤなどにも支店を開設した。新聞業ではヤンゴンで『仰光日報』(1921年創刊)と『緬甸晨報』(1923年創刊)に出資した。また、シンガポールで『星報』(1927年創刊)に出資した[沈 2013: 3-4; 11; 81-82]。

16) 同年の『南洋総匯報』の発行部数は7,500部で、『新国民日報』は9,400部であった[沈 2013: 81]。

華語学校や華語新聞、華語書店・出版社が隆盛するシンガポールは、中国の文化人が集う場ともなった。小説『駱駝祥子 らくだのシアンツ』で知られる老舍は、ヨーロッパ旅行ののちにシンガポールを訪れ、1929年10月から約半年間滞在して南洋華僑中学で教鞭をとった[林 1978: 19]。南洋の文化や政治、芸術の研究を促進するために1940年3月に設立された南洋学会は、文学者の郁達夫や、歴史研究者の姚楠、許雲樵、張礼千、劉士木など、中国とシンガポールとを往来する文化人によって設立された。郁達夫や張礼千、姚楠、許雲樵は、『星洲日報』で編集に従事した経験を持つ。南洋学会の叢書は商務印書館により刊行された[周星衢基金 2016: 35-36]。エスペラント語の研究者で上海の商務印書館の編集者を務めていた胡愈之は、1940年に『南洋商報』の編集主任としてシンガポールに渡った。

1930年代以降に中国からシンガポールに移り文芸活動を行っていた者の多くは、日中戦争が激化したためにシンガポールに逃れた者であった。郁達夫や胡愈之などは文芸を通じて抗日活動を行っていた。

日本占領期に華語学校は閉校され、華語新聞も停刊になったが、第二次世界大戦後のシンガポールはマラッカ海峡地域における華語教育および華語文芸活動の中心地として復活を遂げた。その際に第二次世界大戦以前の華語教育・文芸活動が遺産となった。また、シンガポールには1949年にマラヤ大学(University of Malaya)が、1956年に南洋大学(Nanyang University)¹⁷⁾がそれぞれ開校し、向学心にあふれた若者たちがマラヤ全土から、さらに中国やインドネシアからもシンガポールに集まった。これらの大学がシンガポールに開校されたのはシンガポールが情報や教育、文化の中心であったためである。また、学生や教員の知的活動を支えたのは、シンガポールが第二次世界大戦以前から蓄積してきた情報や教育、文化などの資産であった。

17) マラヤ大学に入学するには高度な英語力が必要で、英語力を備えていない華語中学の卒業生には入学が困難だった。華語中学の卒業生に高等教育を受ける機会を提供するため、タン・ラクサイ(Tan Lark Sye/陳六使)が主導し、シンガポール福建会館がジュロンに所有していた土地を提供し、マラヤの華人の寄付によって1956年に南洋大学が開校された。南洋大学に関する日本語の研究として、政策との関係からとらえた[田村 2013]がある。

3. 華語・マレー語知識人の登場

3.1 マレー語学習ブーム

1950年代半ば以降、シンガポールの華人の間でマレー語学習ブームが起こった。ヤン・クイイーが回顧録の中で引用している1956年7月22日の『ウトゥサン・ムラユ』によると、シンガポール華語中学学生連合会(新加坡華文中学聯合會/Singapore Chinese Middle School Student Union)や中華美術研究会(The Society of Chinese Artists)、シンガポール工場店舗労働者組合(Singapore Factory and Shop Workers' Union)¹⁸⁾、『南洋商報』、『星洲日報』、『星報』などがマレー語の教室を開いていた。講師を務めたのはマレー語学校の教員やマレー語新聞の記者であったが、そのうち講師が不足し、マレー語に通じた華人知識人や学生もマレー語の講師を務めた[Yang 2006:216-218]。

1959年6月に人民行動党(Peoples' Action Party: PAP)が率いる自治政府が成立した。シンガポールがマラヤ連邦と合併したうえで独立することを目指したPAP政権は、マラヤ連邦の国語であるマレー語をシンガポールの国語に定め、マレー語の普及を図った。1959年9月より教育省は成人を対象とするマレー語教室を31か所で開講し、1万3,000人が参加した。教育大臣は近い将来10万人の参加を見込んでいると述べた[Singapore Free Press 1959.8.28]。

周は、シンガポールで1960年代にマレー語の学習熱が高まった背景を、政府による施策と関係が深いとしている。それによると、シンガポールの教育省は1960年に各言語の学校でマレー語を教授することを決定し、1961年から実施した。マレー語教師が不足していたため、小学校では6年生、中学校では1年生に優先的に教え、可能であればそれ以外の学年にも教えることとなった。また、1961年には公務員に対して教育省が実施するマレー語の試験に合格することを義務付けた。この試験ではマレー語の能力に加えてマレー語文学の知識も出題された。この制度は1979年まで続いた[周 2014:49-50]。

1960年代のマレー語学習ブームの背景にマレー語の習得を奨励した政府の施策が存在したことは事実であろう。しかし、それに先立つ1950年代後半、華人社会にはマレー語を学ぼうとする人たちが一定程度

存在していた。1957年にマラヤ連邦が独立し、1959年にシンガポールが自治を達成し、マラヤ全体がよいよい独立に向かうという機運が高まる中でマレー語の学習熱が高まっていた。マレー語やマレー語文学を紹介する際に、文学を社会変革や独立闘争の武器とし、言語を核として団結したインドネシアの事例が紹介されることも多かった。1959年頃から1963年頃まで、華語の新聞や雑誌にはマラヤやインドネシアにおけるマレー語文学を紹介する論説が多数掲載された。

それらの論説のほんの一例として、例えば[魯 1960; 廖 1960; 張 1961; 柳 1964; 戈 1961; 奧斯曼 1963; 希 1963]がある。「インドネシア文学講座」と題した[魯 1960]は、ルー・ボーイエ(Lu Po Yeh/魯白野)が講師を務め、1960年6月17日から週1回、計10回放送されたテレビ番組「インドネシアの文化」の内容を『南洋商報』が掲載したものをさらに『南洋文摘』にまとめたもので、多くの視聴者・読者がルーの論説に触れたものと思われる。「インドネシア現代文学」と題した[廖 1960]はインドネシア出身で、のちに東南アジア華人研究で有名となるレオ・スルヤディナタ(Leo Suryadinata/廖建裕)¹⁹⁾が書いたものである。スルヤディナタは1959年から1962年にかけて南洋大学で学んでおり[台湾大学政治学研究所 2008:7]、当時はリヤウ・キエンジュー(Liau Kian Djoe)の名前で執筆していた。「現代マレー語と文学の発展」と題した[奧斯曼 1963]は、M.T.オスマン(M. T. Osman)による論説を、のちに中国・東南アジア海上貿易研究で著名となるン・チンキョン(Ng Chin Keong/吳振強)²⁰⁾が訳したもので、1963年6月10日から7月31日にかけて18回連載された。

1962年1月28日付の『ブリタ・ハリアン』(Berita Harian)²¹⁾は、マレー語の文芸活動の発展を推進し、す

18) 1954年にリム・チンシオン(Lim Chin Siong/林清祥)とフォン・スイースアン(Fong Swee Suan/方水双)が設立した。

19) 谷衣というペンネームでマレー語やインドネシア語の文学作品を華語に翻訳したり、マレー語の詩を書いたりした。南洋大学を卒業した後はインドネシア大学、オーストラリアのモナシュ大学、アメリカのオハイオ大学の大学院で学び、1975年以降シンガポール国立大学東南アジア研究所などシンガポールを拠点に研究を行っている[台湾大学政治学研究所 2008:2-6]。

20) ン・チンキョンは、1939年にクアラランプールで生まれ、1955年に南洋華僑中学を卒業し、1961年に南洋大学を卒業した。1967年から1969年まで南洋大学で教え、1969年にアメリカ・ウィスコンシン大学の修士課程に進学し、1971年に修士号を取得して、再び南洋大学で教えた。1980年にオーストラリア国立大学の博士課程に進学し、1983年に博士号を取得。シンガポールに戻り、シンガポール国立大学歴史学科で2002年まで教えた。専門は17世紀から19世紀の中国・東南アジア間の海上貿易。2002年から2006年までChinese Heritage Centreの館長を務めた[新加坡国立大学図書館 2008]。

21) 1957年にストレイツ・タイムズ社から創刊した。誌面はローマ字で表記された。

でにその名がよく知られている華人として、リー・チュアンシウ (Li Chuan Siu/李全寿)、リヤウ・キエンジュー、リム・ホアンブン、ヤン・クイイーなどの名前を挙げている [Berita Harian 1962.1.28]。

マレー語の文芸作品を積極的に華語文芸世界に紹介し、マレー語習得ブームを支え、マレー人の側からもマレー語文芸活動の発展への寄与を認知されていた華人知識人は、主に2つの系譜に分かれる。1つは、第二次世界大戦中にシンガポールからスマトラやジャワに逃れ、そこでマレー語を習得し、第二次世界大戦後はシンガポールに戻って華語・マレー語の文芸活動を展開した華人知識人である。これらの人たちを第一世代と呼ぶ。もう1つは、第二次世界大戦後にマラヤに開校した大学の学生や教員である。比較的若い世代に属するこのグループは第二世代に当たる。その中にはインドネシア出身者やインドネシアに留学する者など、インドネシアとのつながりを持つ者も少なくなかった。これらの人たちの背景を以下で詳しく見てみよう。

3.2 華語・マレー語知識人の第一世代

1930年代から1940年代にかけてシンガポールに移り、文芸を通じて抗日活動を展開していた郁達夫や胡愈之などの華人知識人は、1941年12月に抗日組織のシンガポール華人文化界戦時活動団 (星華文化界戦時工作団) を設立した。シンガポールが日本軍に陥落すると、これらの華人知識人はシンガポールを離れてスマトラ島パヤクンプに疎開した。郁達夫はスマトラ島で日本軍により殺されるが、それ以外の知識人の多くは第二次世界大戦以降にシンガポールに戻った。

第二次世界大戦後のマラヤでは、華語学校が再開し、華語新聞も復刊した。華語学校の数が増加し、1946年に1230校、1950年に1606校、1954年に1513校となった [Tan 1997: 33; 田中 1987: 100]²²⁾。華語教科書の需要は増したが、中華人民共和国の成立後、中国で編集された教科書のマラヤへの輸入は厳しく制限された。そのため、各書店・出版社はマラヤの教育カリキュラムに沿った教科書を編集・発行した。上海書局は、マラヤの事情に通じ、マラッカ海峡地域や香港にとど

まっていた胡愈之などの知識人を招いて教科書を編集・発行した。また、上海書局はジャカルタの出版社とインドネシア・華語版の教科書を作成・発行し、その教科書が1965年までインドネシアのほとんどの華語小学校で使用された [周星衛基金 2016: 37; 56-57]。

こうした経緯を通じて上海書局に移った人物にバオ・スージン (Bao Sijing/包思井) がいる。バオは、1930年代末からシンガポールで書店業に携わり、生活書店という書店を経営していた。1941年12月以降、シンガポール華人文化界戦時活動団の傘下組織で指導的な役割を果たし、シンガポールが日本軍によって陥落した後、郁達夫や胡愈之とともにスマトラ島パヤクンプに疎開するなど、シンガポールで活動していた中国の文化人と密接な関係を持っていた。第二次世界大戦後はシンガポールに戻り、1949年にシンガポールでインドネシア語・華語の辞書『インドネシア語辞典』(印度尼西亞語辭典) を出版した [馬 1991: 42]。バオの働きかけにより、リム・ホアンブンが編集したマレー語・華語の辞書『簡明マレー語・華語辞典』が1959年に上海書局から出版された。

第一世代の華語・マレー語知識人として最もよく知られるのは前節で触れたルー・ポーイエである。ルーは本名を李学敏といい、ほかにも威北華、華希定、樓文牧、越子耕、范濤、姚遠などのペンネームで執筆していた。1923年にイポーに生まれ、初等教育をペラの育才小学で学んだ後、父親と共にマラヤ、スマトラ島、ジャワ島を流浪した²³⁾。1943年から1945年にスマトラ島メダン、キサラン、アサハンなどで過ごし、日本占領期の末期から1947年までインドネシア独立戦争でインドネシア軍の兵士として戦った。その後メダンの華語新聞『民衆報』を経て、1947年にジャカルタに移り興華実験学校で教員を務めた。ジャカルタでは、「1945年世代」の先駆者として位置づけられる詩人ハイリル・アンワルをはじめとするインドネシアの若い文芸活動家たちと交流した [張 2016]。「夜会」(晚会) という作品でルーは、ハイリルと一緒にいると率直で正直な気持ちになり、互いに遠慮なく意見を交わし批評し合うあまり激しい口論となり、絶交を繰り返しながらも、ハイリルを慕い続けた気持ちを綴っている [威

22) シンガポールでは学校数も急増した。1945年に37校だったが、1950年に125校、1954年に204校に増加した。1953年までは華語学校に通う生徒数が英語学校に通う生徒数よりも多かったが、1954年にその数は逆転した。これは、政府の政策によって英語学校への助成が増加し、英語学校の設立が増加したためで、かつ英語重視の政策のために英語学校を選ぶケースが増えたためである [田中 1987: 100-102]。

23) ルーが流浪の遍歴の中で培った多言語・多文化的な精神が近年マレーシアおよびシンガポールで再評価されつつあり、ルーの著作の再版が相次いでいる。『威北華文芸創作集』が2016年にマレーシアの有人出版社から刊行されたのに続き、『馬來散記』と『獅城散記』が2019年にシンガポールの周星衛基金から刊行された。

1955]。

ルーは1948年にシンガポールに移り、華語による文芸活動を展開した。初期の作品には、インドネシアの美しい自然と屈託ない善良な市井の人々や、インドネシア独立戦争を戦う兵士を題材とした短編小説、詩、エッセイが多数ある²⁴⁾。またルーは、シンガポールとマラヤの華人は地域事情に通じていないという思い[威 1954]から、両地域の歴史や文化、社会についてのエッセイを執筆した²⁵⁾。

ルーはマラヤの華人に対して、マレー語の学習を積極的に推進した。1959年には世界書局から、マレー語・華語・英語の辞書『実用マレー語・華語大字典』(実用馬華英大字典)を出版した[張 2016]。後述するように、ルーは1960年に『星洲日報』が開始した特集欄「国語周刊」の編集を担当した。また1961年に刊行した華語とマレー語の二言語による月刊誌『マレー語月刊』(*Majalah Bahasa Melayu*／馬來語月刊)の編集を担当した。

マレー語の学習を推進するなかで、ルーが参照していたのはインドネシアであった。ルーは、インドネシアでは華人が一般的にインドネシア語を学び使用できるように、マラヤの華人もマレー語を学ぶべきだと説いた。マラヤで華人とマレー人の間にもし隔たりがあるならば、それはマレー語を積極的に学ぼうとしなかった華人のせいだとした。異なる民族が相互を理解するには言語が必要で、そのために華人はマレー語を学ばなければならないとした[威 1954]。ルーが確固として華人にマレー語の学習を求めたのは、インドネシアでインドネシアの人たちとインドネシア語で交流するなかで、ハイリルとの関係のように、互いに腹を割って語り、時には決裂しながらも、信頼と敬慕が醸成されていくような関係性を築いた経験に根差していたのであろう。

3.3 華語・マレー語知識人の第二世代

シンガポールにおけるマレー語学習ブームは主に成人の間で進展した。これと並行して学生の間にもマレー語の学習ブームが起り、南洋大学でもマレー語の学習は人気を博した。南洋大学は1958年以降、全学部を対象とした選択科目としてマレー語の授業を2科目開講した。初年度は3年次以上が履修可能で約

300人が履修した。履修資格を持つのは1956年の入学者で、その数は584人であった[大学論壇 1958.3.30]。履修資格を持つ学生の半数以上がマレー語を履修していた計算になる。

マレー語の開講を促したのはヤン・クイイーとリム・ホアンブンを中心とした学生たちであった。彼らは1957年に南洋大学学生会設立準備委員会²⁶⁾に対してマレー語の授業を開講するよう大学に要求するよう求めた。同委員会は大学との交渉を引き受けるとともに、ヤンとリムらに同委員会の主催で夜間にマレー語クラスを開くことを提案した。これを受けてヤンとリムらが講師となってマレー語夜間クラスが開かれ、約200人が参加した[Yang 2006: 208-209]。

ヤン・クイイーは1931年にジョホール州ポンティアン郡パリットカウィ(Parit Kawi)で生まれた。父母は福建省出身で、シンガポールからジョホールバルを経てパリットカウィに移り、ゴムの栽培などを営んでいた。ヤン家の近隣はマレー人世帯で、互いの家を行き来するなど密接な付き合いをしており、その中でヤンはマレー語に親しんでいた。しかし、ヤンは華語小学校に入学して以降マレー語世界と疎遠になっていた。ヤンは1947年にシンガポールの中正中学に進学し、1949年に南洋華僑中学に転校した。そこでヤンはインドネシア出身で華語とインドネシア語を自由に操れる同級生に出会った。ヤンはその能力に感嘆してマレー語を習得したいと思うようになった。ヤンは1950年5月にマラヤ共産党との関係を疑われて拘留され²⁷⁾、パリットカウィに送還された。ジョホールバルの雑貨店で店員をしていた間に『ウトゥサン・ムラユ』をテキストに独学でマレー語を学び、1956年に南洋大学に入学した²⁸⁾。1961年から2年間インドネシア大学に留学し、インドネシア語とインドネシア文学を学んだ。

26) 南洋大学学生会の設立を準備するための委員会。学生会は1958年4月に設立された[大学論壇 1958.5.23]。

27) 1950年5月31日、警察と教育省が南洋華僑中学で大規模な捜査を行い、学生19人と教員1人を勾留した。同日夕方までに学生6人が釈放されたが、それ以外の者の勾留は続き、南洋華僑中学は封鎖された。華語学校を担当する教育長官補佐は、南洋華僑中学を捜査した結果、マラヤ共産党が刊行する学生向けのニューズレターや、マラヤ共産党が発行したマラヤ民族解放軍への寄付金の領収書、マラヤ共産党の学内組織の議事録などを押収したと発表し、1950年学校登録条例に基づき、南洋華僑中学に対し、同校が非合法でないという証拠を提出することができなければ同校を閉鎖すると通告した。南洋華僑中学は8月半ばまで閉鎖された[Straits Times 1950.6.2; 1950.8.12]。

28) ヤンの経歴についてはヤンの回顧録[Yang 2006]を参照。この回顧録には1950年代から60年代のシンガポールにおける華語文芸世界とマレー語文芸世界の交差が克明に記されている。

24) これらの作品は、『春耕』(1955年)および『黎明前的行脚』(1960年)に再録された。

25) それぞれ『獅城散記』(1953年)および『馬來散記』(1954年)として出版した。

リム・ホアンブンは、1929年にシンガポールに生まれ、1950年に中正中学を卒業し、1956年に27歳で南洋大学に入学した[丘 2011: 88]。リムは南洋大学に入学する7年前にマレー語を学び始めた。マレー語を学ぶためのテキストはほとんどなく、ラッフルズ図書館にあったマレー語会話のテキストを使ってマレー語の学習を始めた。リムも『ウトゥサン・ムラユ』をテキストとして同紙の講読を日課としていた。南洋大学に入学する前からマレー語・華語の通訳として経験を積んだり、ウスマン・アワン (Usman Awang) の詩をマレー語から華語に訳したりする活動を行っていた[Lim 2011: 217-219]。

1958年に南洋大学に開講されたマレー語の授業は、元インドネシア総領事のラシド・マナン (Rashid Manan) が担当した。しかし履修者があまりにも多かったため、教員を増員してクラスを増やした。新たな教員として赴任したのがリー・チュアンシウ²⁹⁾であった。リーは1914年にスラカルタで生まれ、スマランの華人英語学校、廈門の集美学校、ジャカルタのインドネシア大学文学部で教育を受け、1953年に中国研究およびマレー・インドネシア言語文学の修士号を取得した。その後、インドネシア大学で華語の講師を務めつつ、インドネシア華僑高級商業学校 (Kao Shang School/印尼華僑高級商業学校)³⁰⁾でインドネシア語を教えた[Suryadinata 2015: 144-145]。

南洋大学学生会は1957年12月14日に華語で『大学論壇』を刊行し、翌1958年に英語とマレー語でそれぞれ「大学論壇」を意味する『ユニバーシティ・トリビューン』(*University Tribune*) と『ミンバル・ユニバーシティ』(*Mimbar Universiti*) を刊行した。ヤンとリム・ホアンブンは、ゴー・チューケンがマレー語版を担当した。南洋大学での教育状況や学生生活の他に、マレー語やマレー文学、マレー人の教育などについても記事を掲載し、ヤンやリー・チュアンシウ、ラシド・マナンなどが寄稿した[Yang 2006: 220-221]。

29) インドネシアでLie Tjwan Sioeという名前で『印尼語読本文法合編』第1-3冊／*Kitab Batjaan dan Tatabahasa Indonesia*, Jilid 1-3, *Tatabahasa Indonesia untuk Sekolah Menengah Tionghoa*, *Surat-Menyurat Perniagaan Baharu*, *Tjeritera2 untuk Batjaan Sekolah Menengah Tionghoa*などインドネシア語・華語併記の教材を作っていた[Yang 2006: 192]。リーはシンガポールに移ってから、Li Chuan Siuという綴りを使うようになった[Li 1994: 125-126]。リーは1964年に南洋大学を去り、同年から79年までシドニー大学で講師を務めた。1979年から80年まで北京語言学院で客員教授を務めたのち、1980年にシドニーに戻った。1998年没[Suryadinata 2015: 144-145]。

30) インドネシア中華商會連合会が1949年に設立した。

ヤンたちが卒業したのちに『ミンバル・ユニバーシティ』の編集を担ったのが、インドネシア出身のレオ・スルヤディナタであった。スルヤディナタは1941年にジャカルタでインドネシア語を家庭の言語とする華人の家に生まれ、初等教育と中等教育をジャカルタの華語学校で受けた[台湾大学政治学研究所 2008: 2]。

1950年代後半、南洋大学にはインドネシア出身の学生が10名から20名ほどいた³¹⁾。また、ヤン・クイイーの回想には南洋華僑中学で学んでいた時に出会ったインドネシア出身者が登場する。ヤンが南洋華僑中学時代に勾留された時にインドネシア出身者も一緒に捉えられており[Straits Times 1950.7.18]、インドネシアからシンガポールに学びにくる者が少なくなかったことを示している。

東インドでは、バタヴィア中華會館が華人の子弟を対象とした近代的な教育機関の設立を目的とし、1901年に中華学堂を設立した。東インドでは、これ以降、華語で教授する近代的な学校が設立された。1935年までに東インド全体で450校の華語学校が存在した[黄 2005: 35; 79]。第二次世界大戦後に華語学校の数は増え続け、1950年に816校、1957年に1800校に達した[黄 2005: 126]。この背景には、インドネシアで1950年代にオランダ式学校が衰退し、インドネシアの公立学校も不足していたため、華語学校を選ぶ華人が多かったことがあった[貞好 2016: 147]。しかし、1957年にインドネシア政府はインドネシア国籍者が外国のカリキュラムに即した学校で学ぶことを禁止した[黄 2005: 126; 貞好 2016: 150-151]。スルヤディナタによると、同年を最終年度とする者には猶予が与えられたため、スルヤディナタは当時在籍していたバタヴィア中学 (巴城中学) を1958年に卒業することができた。同級生の中には中国に帰国する者が多かったが、スルヤディナタはオーストラリアかイギリスに行

31) 1950年代後半、南洋大学の学生の約半分はマラヤ連邦の出身者で、その次にシンガポール、中国が続いた。

表 南洋大学入学者(1956~58年)の出身地

	1956年	1957年	1958年	合計	割合
マラヤ連邦	243	186	290	719	49.1%
シンガポール	170	87	131	388	26.5%
中国	126	69	47	242	16.5%
インドネシア	28	15	19	62	4.2%
香港	7	1	3	11	0.8%
サラワク	6	13	12	31	2.1%
タイ	3	3	3	9	0.6%
フィリピン	1	0	0	1	0.1%
北ボルネオ	0	0	2	2	0.1%
合計	584	374	507	1,465	

出所:『大学論壇』1958年3月30日。

こうと考えていた。しかしちょうど南洋大学が学生を募集しており、父の友人がシンガポールにいたことから南洋大学の受験を決め、1959年に南洋大学に入学した〔台湾大学政治学研究所 2008:2-3〕。

東インドがインドネシアとして独立して以降、インドネシアの華人はたびたび暴力にさらされた。1945年から49年の独立戦争期に植民地の秩序や制度を否定する社会革命が進展し、華人はオランダ協力者とみなされ、生命や財産を奪われる過酷な経験を強いられた者も多かった〔貞好 2016:137-140〕。また1950年代以降、経済ナショナリズムが進展し、実質的に華人を排除する政策が導入された。1959年に発布された大統領令10号は外国籍者が郡都レベル以下の村落部で小売業に従事することを禁じた。この政令は全土で貫徹されたわけではなかったが、西ジャワやスマトラ、スラウェシのいくつかの州で地方軍司令部により外国籍華人が強制的に居住地を追われる事件を招来し、1960年にかけて10万人を超える華人が中国などへの出国を余儀なくされる事態を招いた〔貞好 2016:142-143〕。独立から1960年までにインドネシアを離れた華人にとって、シンガポールも選択肢の一つであった。

マラヤ大学にも華語・マレー語知識人が存在した。上海書局の創設者である陳岳書の娘のリンダ・チェン (Linda Chen Mong Hock/陳蒙鶴) はその一人である。チェンは1929年に中国で生まれ、3歳からシンガポールで暮らした。シンガポールの中正中学とセント・マーガレット・スクールで教育を受け、華語、マレー語、英語を使うことができた。1951年にマラヤ大学歴史学科に入学し、『アル・イマーム』(Al-Imam)の創刊者の1人であり、イスラム改革運動カウム・ムダの主導者として知られるサイイド・シャイフ・アフマド・アルハディ (Syed Syekh Ahmad al-Hadi) について卒業論文を書いた。在学中は大学社会主義者クラブ (University Socialist Club)³²⁾で活発な活動を行い、1956年と1963年に拘留された。1959年に『マレー語語法読本』(馬來語語法讀本)を、1961年に『華馬大辞典』を出版している³³⁾。リム・ホアンブンや、ウスマン・

アワン、アスラフ (Asraf) などとの交友も深く、ウスマン・アワンはリムやチェンに向けて詩を書いている〔Tan 2007; 呉 2018〕。

3.4 華人知識人にとってのマレー語

華人知識人がマレー語をどのようにとらえていたのか、また、なぜマレー語の発展に力を注いだのか、第二世代を中心に見てみよう。

まず、ヤン・クイイーの論考から、マレー語をどのようにとらえていたのかを探してみたい。1960年1月30日からマラヤ連邦で実施された国語週間に際して、ヤンは、その中心となっていたクアラルンプールに赴き、トゥンク・アブドゥル・ラーマン・ホールで開催されていた展覧会を見た感想を綴っている。『ウトゥサン・ムラユ』や『ブリタ・ハリアン』の展示について、編集・印刷工程を紹介するとともに、日々の報道を伝えるうえでどのように新しい語彙を吸収していくかというマレー語開発の最先端の様子を紹介している。また、言語図書館 (Dewan Bahasa dan Pustaka) の展示について、マラヤ各地やインドネシアで出版されたマレー語の書籍や130年以上前に書かれた手書きのジャウイ表記マレー語文書などが展示されていたことを紹介している。最後にオックスフォード出版部の展示に触れ、シェークスピアやトルストイなど世界の名著をマレー語に翻訳して出版していることを紹介している。ヤンは、国語週間が新しい始まりとなり、民族を問わず国家の魂である言語を発展させていくべきとしめくっている〔馬 1960〕。この文章からヤンは、マレー語が長い歴史を持ち、英語が優先された植民地時代を経ても生き残り、時代の流れに適應すべく語彙の開発や最新の出版技術の導入という努力の中にあり、翻訳可能な言語であることとらえていることがわかる。

次に、マレー語の発展になぜ力を注いだのかを、ヤンが創刊した雑誌から探してみたい。ヤンは1959年に南洋大学を卒業して『南洋商報』に記者として職を得た。記者を務めるかたわら、1960年12月に雑誌『ブダヤ』(Budaya)³⁴⁾を創刊した。マレー語で文化を意味する「ブダヤ」をタイトルにしたこの雑誌の編集者を務めたのがスルヤディナタであった。

32) 1953年2月にマラヤ大学で設立。設立メンバーは、ジェイムズ・プトゥチュアリ (James Puthucheary)、シドニー・ウッドフル (Sydney Woodhull)、ワン・グンウ (Wang Gungwu/王康武)、フィルメン・ウルジットマン (Philmen Oorjitman)、M.K.ラジャクマル (M.K. Rajakumar)、ポー・スーカイ (Poh Soo Kai/傅樹介) など。メンバーの多くがのちに社会主義戦線を支持し、左派系の活動家を一齐に取り締まった1963年のコールドストア作戦で拘留された。大学社会主義者クラブについての研究に〔Loh et al 2013〕がある。

33) このほかに本稿も参照している〔Chen 1967〕も有名である。

34) 『ブダヤ』は第3号で停刊した。ヤンやスルヤディナタなど『ブダヤ』の編集に携わっていた者が1962年にシンガポールを離れたためである。ヤンは1961年2月から1年半、ジャカルタのインドネシア大学文学部インドネシア語・文学学科に留学した〔Yang 2006: 238-239〕。スルヤディナタは1962年12月にインドネシアに帰国し、インドネシア大学で学んだ。

創刊号にはヤンによる「文化を発展させる責務」(Tugas Memperkembangkan Kebudayaan)の論説が収められている[Yang 2006:221-223]。この中でヤンは以下のように述べている。

マラヤ連邦は独立を達成し、シンガポールは自治を達成した。我々には、種族主義に拠らない誠実なマラヤ民族(bangsa Malaya)を作り上げるために、美しく健全で豊かなマラヤ的な文化を構築する責務がある。ここでの文化は、芸術や芸能、文学のみならず、宗教や法律、教養など人間の生活にかかわる活動を指す。マラヤは7世紀以降インド文明の影響を受け、15世紀以降はアラブ世界からイスラム教を受容し、中国、ポルトガル、オランダ、イギリスなど外部の影響を受けた。これら外部の要素は欠点ではなく、われわれの文化を彩り豊かに発展させる要素である。マラヤは特別な国(negeri)で、居住者はマレー人、華人、インド人など多様な民族で構成されている。お互いに交流し、平和に調和を保って共存してきた。マラヤの各民族の文化的要素や東西文化の要素など、異なる出自をもつ文化的要素を受け入れることで、我々の国民文化(kebudayaan nasional)は豊かになる[Yang 1960]³⁵⁾。

創刊号には編集者のスルヤディナタが序言を寄せており、その内容はヤンの論説とほぼ同じである。スルヤディナタはマラヤ連邦とシンガポールのマラヤの人たちに対し、国語であるマレー語を通じて相互理解や意見交換を図ることを呼び掛けた。また、文化的背景が異なる多様な民族で構成される新国家マラヤには、マラヤの文化が必要であると訴えた。それは、中国、マレー、インド、西洋のいずれか特定のものではなく、これらの諸要素によって構成されるマラヤの精神を持つ文化であるべきだと訴えた。また、そのような思いから新たに創刊した雑誌に「文化」というタイトルを付けたと述べた[Liauw 1960:1-2]。

マレー語を通じて相互理解を図り、マラヤ文化を確立してマラヤという国家を建設しようという思いが、華語・マレー語知識人をマレー語の促進に動かしていた。こうした国家建設の希求は、『ウトゥサン・ムラユ』を中心に活動していたマレー語知識人が共有する思いでもあった。

4. マレー語文芸界との交差

4.1 ASAS 50グループとの交流

華人社会におけるマレー語学習熱はマレー人社会にも注目された。とりわけウトゥサン・ムラユ社の記者はしばしば南洋大学を訪れ、『ウトゥサン・ムラユ』や『マスティカ』に南洋大学についての記事を掲載していた。ヤンとリムらもセシル通りにあるウトゥサン・ムラユ社をしばしば訪ねた。そこでヤンたちは、『ウトゥサン・ムラユ』や『マスティカ』、『ウトゥサン・ザマン』などで中心的な役割を担っていたクリス・マス(Keris Mas)やウスマン・アワン、アスラフ、フセイン・ジャヒディン(Hussein Jahidin)と知り合う機会を得た。クリス・マスとウスマン・アワンはヤンやリムたちとしばしば会うようになった。また、アスラフはしばしば南洋大学にヤンとリムたちを訪ねた。アスラフは時には夜やってきて、ヤンたちと食堂でコーヒーを飲みながら社会におけるマレー語の役割について夜遅くまで意見を交わし、約25キロの道のりを帰っていった。アスラフはヤンたちの依頼で、妻とともに、華人を対象としたマレー語教室の講師を務めた[Yang 2006:222-224]。リムとヤンは、クリス・マス、ウスマン・アワン、アスラフと生涯にわたって交友をもった。

クリス・マス、ウスマン・アワン、アスラフは、いずれも1950年代に『ウトゥサン・ムラユ』の記者を務め、1950年代のマレー語文芸活動を率いた50年作家世代(Angkatan Sasterawan 50:ASAS 50)の中心人物であった。ASAS 50は「社会のための芸術」を掲げ、独立のための闘争、社会的な公正の確立、進歩的な思想や価値観の発展を目標に文芸活動を行った[S. Husin Ali 1981,25]。彼らは『ウトゥサン・ムラユ』、『ウトゥサン・ザマン』、『マスティカ』の編集を担っており、1950年代のマレー語文壇はASAS 50のグループがほぼ独占していた状況であった[Ungku Maimunah 1987: 41]。また、1951年から1952年にラジオ・マラヤがASAS 50とマレー語協会(Lembaga Bahasa Melayu)³⁶⁾から講師を招いて講義を21回放送しており、ASAS 50はラジオ放送においても主張を社会に伝える機会を持っていた[S. Husin Ali 1981:24]。

36) 1950年に活動を開始し、1951年に正式に設立。メンバーの多くは、教員、メディア(ラジオ・マラヤ)や出版社の職員、記者、作家などで、ASAS 50のメンバーよりも年代が上で、文芸界ですでに名を知られた者も多かった[S. Husin Ali 1981, 22]。

35) 本稿では『ブダヤ』に転載されたものを参照した。

1950年代にマレー語文壇を主導したASAS 50とその中心にいた3人は華人の間でも有名であった。華語の新聞や雑誌はたびたびASAS 50を紹介していた。「現代マレー語文学」と題した[黄 1961]の記事では、ASAS 50が設立された時の様子を詳細に描きつつ、現代マレー語文壇において3人の役割が非常に大きいと紹介している[黄 1961]。

南洋大学のマレー語の学生新聞『ミンバル・ユニバーシティ』に掲載された記事が『ウトゥサン・ムラユ』や『マスティカ』に転載されることもあった。そのなかには先に紹介したヤンの「文化を発展させる責務」もあった。特定の民族の文化的要素のみに依拠しない新たなマラヤ文化を建設しようと訴えたヤンの論説が『ウトゥサン・ムラユ』に転載されたことは、こうした考えがマレー語を解する読者層に一定程度受け入れられていたことを示している。同様の内容の論説をM.ヌール・アザム(M. Noor Azam)が『ブリタ・ハリアン』に寄せている。ヌール・アザムは、マレー人は1つの国民ではなく、マラヤ連邦国籍者を構成する華人、インド人、シャム人などと同様の1つの民族に過ぎないと述べ、マラヤ文化はマレー人の文化だけではなくマラヤの様々な民族の文化に依拠するマラヤ民族(bangsa Malaya)の文化であるべきだと述べた[M. Noor 1960]。

ヌール・アザムの論説を掲載した『ブリタ・ハリアン』では、アブドゥル・サマド・イスマイル(Abdul Samad Ismail)³⁷⁾が主筆を務めていた。サマド・イスマイルは1941年から『ウトゥサン・ムラユ』で記者を務めており、ASAS 50が掲げる文学を通じた社会改革に積極的な人物の1人であった。1958年にストレイツ・タイムズ社に移り、『ブリタ・ハリアン』の主筆を務めた。

ヌール・アザムによる論説は1960年3月4日の『南洋商報』に転載され[南洋商報 1960.3.4]、マレー語文芸世界と華語文芸世界が相互を参照していたことがわかる。

4.2 1950年代の『ウトゥサン・ムラユ』

『ウトゥサン・ムラユ』は1907年に創刊され、1921年に停刊したのち、1939年に復刊した。復刊当時の『ウトゥサン・ムラユ』はアラブ系やインド系のムスリムに対してマレー人の発言力を拡大することを目的としていた。シンガポールで発行されていたマレー語

新聞はいずれもアラブ系やインド系のムスリムが所有していた。これに対してマレー人が所有する新聞を創刊すべきであるとの提案がなされ、ユスフ・イスハク(Yusuf Ishak)が中心となって資金集めをして復刊に至った。この提案は、シンガポール・マレー人協会(Kesatuan Melayu Singapura)の当時の会長のダウド・モハマド・シャー(Daud Mohd. Shah)の家で会合が行われた時になされたものであった[Roff 1994:174-176]。シンガポール・マレー人協会も、マレー・ムスリム社会におけるマレー人の発言力を拡大するために、モハメド・ユーノス・アブドゥッラー(Mohd. Eunus Abdullah)³⁸⁾などによって1926年に設立された組織であった。ユーノスは1907年の『ウトゥサン・ムラユ』の創刊時に主筆を務めた人物で、「マレー・ジャーナリズムの父」と称される[Roff 1994: 190]。1938年以降、同様のマレー人組織がマラヤ各地に設立され[Roff 1994: 230]、1946年5月にこれらのマレー人協会が結集するかたちで統一マレー人国民組織(United Malays National Organisation: UMNO)が設立された。

『ウトゥサン・ムラユ』は系譜的にはUMNOに連なるメディアであった。しかし1940年代後半以降、『ウトゥサン・ムラユ』には、UMNOと競合的なマレー人左派の流れをくむ人物が中心的な役割を担うようになっていた。

マレー人左派は、イブラヒム・ヤアコブ(Ibrahim Yaacob)³⁹⁾が1938年に設立した青年マレー人協会(Kesatuan Melayu Muda)に源流をたどりうる。KMMに参加していた者たちが1945年10月にマラヤ・ムラユ民族党(Partai Kebangsaan Melayu Malaya: PKMM)を設立した。イギリス植民地統治からの独立を求めるPKMMは、1946年10月の党大会以降、非マレー人との協力を強めることによりUMNOおよび植民地政府に対抗する路線を採るようになった[山本 2006: 54]。PKMMは、マラヤの独立を担う主体として、ムラ

38) スマトラ島を出自とするミナンカバウ人の富裕な商人のもとに1876年にシンガポールに生まれた。マレー語学校ののちにラッフルズ学院に進学して英語で教育を受けた。英語紙を発行していたフリー・プレスの所有者に招かれ、同紙のマレー語版として1907年に創刊された『ウトゥサン・ムラユ』の編集を務めた。ユーノスは1922年に治安判事に任命され、1924年に海峡植民地立法参事会の最初のマレー人議員に任命された。ムスリム諮詢局(Muslim Advisory Board)のメンバーも務めた[Roff 1994: 159-160]。

39) パハンのトゥムルロー(Temerloh)に1911年に生まれた。ペラのスルタン・イドリス師範学校を1929年に卒業。インドネシア・ナショナリズムの左派的な思想や活動に強い影響を受け、東インドの社会主義組織をモデルにKMMを組織した[Roff 1994: 172-173: 222]。

37) サマド・イスマイルはジャワ人の両親のもとに1924年シンガポールで生まれた。PAPと労働組合に参加。1951年から1953年に共産主義活動の疑いで勾留された。

ユの文化に基づきマラヤの政治的統合を支持する考えを共有するのであれば血統的・民族的な出自を問わず、華人やインド人であってもその民族性を変えることなくムラユ民族になれるとした[Ariffin 1993:113-114; 山本 2006: 55]。

1950年代にASAS 50を主導し、マレー語文壇の中心であったクリス・マスとアスラフは、PKMMやその青年組織で活動していたことで知られる。クリス・マスはPKMMのパハン州トゥムルローの情報部の幹部であった[Ungku Maimunah 1987:36]。アスラフはPKMMの青年組織である先覚青年部隊(Angkatan Pemuda Insaf)で活発に活動していた[Ungku Maimunah 1987:36]。1957年まで『ウトゥサン・ムラユ』にいたサマド・イスマイルも、共産主義活動の疑いで勾留された経験を持ち、労働組合に参加していた。しかしこれら左派系のグループは、1948年の非常事態宣言と前後して、非合法化されたり中心メンバーが逮捕されたりするなどして組織的にほぼ解体した。PKMMの支持者たちは、マラヤ連邦の外部にあって左派活動に対する取り締まりが比較的緩やかだったシンガポールに移った。彼らは真っ向から植民地政府に対抗する政治的な活動を行うのではなく、「社会のための芸術」をスローガンとして文学を通じて社会を変革する手段をとった。こうした背景を持つ者たちが『ウトゥサン・ムラユ』に集った[Ungku Maimunah 1987:33-40; Zahairin 2006:261-274]。このような系譜を持つマレー語知識人たちとマレー語を操る華語知識人たちが1950年代に交差したのである。

5. 華語・マレー語並存の文芸空間の成立

『南洋商報』は1960年2月29日から「国語学習」という特集欄を毎週月曜日に連載した[南洋商報 1960.2.27]。「国語学習」の編集者は当初リム・ホアンブンが務め、1965年3月以降はヤンが務めた⁴⁰⁾[周 1994: 51, Yang 2006:244]。『星洲日報』では「国語周刊」という特集欄が1960年4月8日に開始され、ルー・ポー

40) リム・ホアンブンは1963年9月のシンガポール州議会選挙で社会主義戦線(Barisan Sosialis)から立候補して当選し、ブリクメラ選挙区議員となった。しかし社会主義戦線の党首リー・シウチャー(Lee Siew Choh)が1965年に将来の選挙と議会をボイコットすると宣言したことに対し、リムは「民主主義への裏切りであるだけでなくわれわれを選んでくれた人たちに對する裏切りである」と反発し、議員を辞任した[Straits Times 1966.1.11]。

イエが編集を担当した。『南洋商報』の「国語学習」は1970年1月19日まで498号を刊行し、『星洲日報』の「国語周刊」は1971年2月22日まで472号を刊行した[周 1994:51]。ヤンによれば、2紙のマレー語コーナーはクアラルンプールの『南洋商報』と『星洲日報』が編集を担当することになり、1980年代まで続いた[Yang 2006: 244-245]。

1960年代には華語とマレー語の2言語による月刊誌が刊行された。そのなかで最も長期にわたり出版されたのが『マレー語月刊』(*Majalah Bahasa Melayu* / 馬來語月刊)であった⁴¹⁾。同誌はシンガポールの世界書局が所有していたマレー文化促進機構出版(Pengusaha Perkembangan Persuratan Melayu)より出版された。編者はルー・ボーイエとアブドゥッラー・フサイン(Abdullah Hussain)⁴²⁾であった。『マレー語月刊』は、ルーの編集のもと読者に人気があったが、ルーが38歳の若さで逝去して編者が不在となったため、1961年5月20日に出版された17号を最後に一時停刊になった。出版社はヤンに同誌の編集を依頼したが、ヤンはインドネシア留学を控えていたためにこれを辞し、南洋大学の後輩を紹介し、のちにヤンの妻となるチャン・ミュウワー(Chan Meow Wah / 陳妙華)⁴³⁾に後輩を手伝うよう頼んだ。ほどなくして後輩が編者を辞したため、1962年6月からチャンが同誌の編者を務めた。同誌は1970年4月に閉刊するまで110号を刊行した[Yang 2006:242-243]。

シンガポールは早くから華語文芸世界とマレー文芸世界がそれぞれ発展した場であった。華語文芸世界には、マラヤやインドネシアでマレー・インドネシア語に親しみ、異なる民族がマレー語を通じて意思疎通と相互理解を深め、近代的な国家として独立を達成しようという熱意を持つ者が現れた。マレー語文芸世界には、民族や出自を問わないムラユ民族を構築することでマラヤの独立を志向する者が現れた。彼らがそれぞれの文芸世界を互いに橋渡しすることにより、1950年代のシンガポールには華語文芸世界とマレー語文芸世界が交差する空間が生まれていた。

41) 『マレー語月刊』のほかに、シンガポールの上海書局が1961年9月から1964年8月まで刊行した『国語月刊』(*Bulanan Bahasa Kebangsaan* / 國語月刊)があった。また、1号のみであったが、クアラルンプールの中国報(*China Press*)が刊行した『国語週刊』(*Mingguan Bahasa Kebangsaan*)もあった[Yang 2006:244]。

42) アブドゥッラー・フサインについては本書の西論文を参照。

43) 1936年中国広東省生まれ。シンガポールの南洋女子中学を卒業。マレー語の小説の華語への翻訳やマレー語・華語の辞書編集に携わる[潘主編 2016: 56-57]。

参考文献

- 市川健二郎 1984「陳嘉庚——ある華僑の心の故郷」『東南アジア 歴史と文化』13, 3-28.
- 貞好康志 2016『華人のインドネシア現代史——はるかなる国民統合への道』木犀社。
- 田中恭子 1987「シンガポールの言語政策——アジアの民族と国家 東南アジアを中心として」『国際政治』84, 95-117.
- 田村慶子 2013『多民族国家シンガポールの政治と言語——『消滅』した南洋大学の25年』明石書店。
- 山本博之 2006『脱植民地化とナショナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会。
- Ariffin Omar. 1993. *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community, 1945-1950*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Chong Fah Hing. 2003. “Sarjana Nantah dan Peranannya dalam Pengembangan Bahasa dan Sastra Melayu”. *Sari*. 21. 151-170.
- Huff, W. G. 1994. *The Economic Growth of Singapore: Trade and Development in the Twentieth Century*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Li Chuan Siu. 1994. *Dari Sinologi ke Indologi*. Kuala Lumpur: Pustaka Antara.
- Leo Suryadinata. 2015. *Prominent Indonesian Chinese: Biographical Sketches*. 4th edition. Singapore: ISEAS Publishing.
- Liauw Kian Djoe. 1960. “Kata Pengantar”. *Budaya*. 1. 1-2.
- Lim Huan Boon (translated by Edgar Liao Bolun). 2011. “My Recollection of Learning Malay”. Tan Jing Quee, Tan Kok Chiang and Hong Lysa eds. 2011. *The May 13 Generation: The Chinese Middle Schools Student Movement and Singapore Politics in the 1950s*. Petaling Jaya: Strategic Information and Research Development Centre. 217-225.
- Loh Kah Seng, Edgar Liao, Lim Cheng Tju and Seng Guo-Quan eds. 2013. *The University Socialist Club and the Contest for Malaya: Tangled Strands of Modernity*. Singapore: NUS Press.
- M. Noor Azam. 1960. “Bagaimana Kebudayaan Malayan Harus Di-Bentok”. *Berita Harian*. 23 February 1960.
- Wright, Arnold and Cartwright, H. A. eds. 1908, *Twentieth Century Impressions of British Malaya: Its History, People, Commerce, Industries, and Resources*, London: Lloyd's Greater Britain Publishing Company Ltd.
- Roff, William R. 1994. *Origins of Malay Nationalism*, 2nd edition, Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- S. Husin Ali. 1981. “ASAS 50 dan Cita-cita Kemasyarakatannya”. Institut Analisa Sosial. 1981. *Warisan ASAS 50: Kumpulan Kertas Kerja Ceramah dan Bengkel “ASAS 50 dan Sastra Melayu Modern”*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka. 21-31.
- Tan, Bonny. 2011. “The Straits Chinese Magazine: A Malayan Voice”. *Biblio Asia*. 7(2). 30-35.
- Tan Jing Quee. 2007. “In Memory of Linda Chen (1928-2002)”, web site s/pores, 10 April 2007, <https://s-pores.com/2007/04/linda-chen/>.
- Ungku Maimunah Mohd. Tahir. 1987. *Modern Malay Literary Culture: A Historical Perspective*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Yang Kui Yee. 1960. “Tugas Memperkembangkan Kebudayaan Malaya”. *Budaya*. 1. 19-23.
- Yang Quee Yee. 2006. *Memoir Yang Quee Yee: Penyusun Kamus Anak Penoreh*. Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia. 2006.
- Yong, C. F.. 2014. *Tan Kah-Kee: The Making of an Overseas Chinese Legend*. Revised Edition. Singapore: World Scientific Publishing.
- Zahairin Abdul Rahman. 2006. “The Voice of the Rakyat: Utusan Melayu from Inception to 1959”. Khoo Kay Kim, Eliah Abdullah and Wan Meng Hao eds.. 2006. *Malays/Muslims in Singapore: Selected Readings in History, 1819-1965*. Subang Jaya: Pelanduk Publications, 245-280.
- M. T. 奧斯曼 (吳振強訳) 1963「現代馬來語與文學的發展」『南洋商報』1961年6月10日。
- 沈儀婷 2013『譜寫虎標傳奇——胡文虎及其創業文化史』Singapore: 國立新加坡大學中文系、新加坡茶陽(大埔)會館客家文化研究室、八方文化創作室。
- 方修 1986『馬華新文學簡史』Kuala Lumpur: 董總出版。
- 黃小谷 1961「現代馬來文學」『南洋商報』1961年1月1日。
- 戈江之 1961「論十年來的印尼文學運動」『南洋商報』, 1961年1月1日。
- 柯木林主編 1995『新華歷史人物列傳』Singapore: 教育出版社。
- 李全壽(楊夷訳) 1958「南大的馬來語文課程」『大學論壇』1958年11月26日。
- 廖建裕 1960「印度尼西亞現代文學」『南洋文摘』8. 61-72.
- 林万菁 1978『中國作家在新加坡及其影響』Singapore: 萬里書局。
- 魯白野 1960「印尼文學講座」『南洋文摘』12. 8-22.
- 馬崙 1991『新馬文壇人物插描』Skudai: 書輝出版社。
- 馬豈 1960「繼續發揚國語週的精神」『南洋文摘』5. 4-5.

- 潘国駒主編 2016『新加坡潮州文化名人錄』Singapore: 八方文化企業。
- 丘淑玲 2011「一九五零, 六零年代新加坡華校學生運動的交替与延續——從“中學聯”到南大学生會」陳仁貴、陳国相、孔莉莎編『情系五一三: 一九五零年代新加坡華文中学學生運動与政治變革』Petaling Jaya: 策略資訊研究中心, 84-95。
- 台灣大學政治學研究所 2008「一個南洋華人的學術之旅——寥建裕教授訪問錄」台灣大學政治學系中國大陸暨兩岸關係教學研究中心中國學的知識社群研究計畫, <http://www.china-studies.taipei/comm2/interviewS%20Leo%20Suryadinata%20new.pdf>。
- 王慷鼎 1998「獨立前華文報刊」林水椽、何啓良、何国忠、賴觀福『馬來西亞華人新編 第三冊』Kuala Lumpur: 馬來西亞中華大會堂總會, 87-130。
- 吳小保 2016「國語運動的多重性——馬、新華巫語文菁英的語言理念分析」『台灣東南亞學刊』11(2), 107-140。
- 「陳蒙鶴的生平與時代」e-南洋, 2008年10月19日, <http://www.enanyang.my/news/20181019/%E9%99%88%E8%92%99%E9%B9%A4%E7%9A%84%E7%94%9F%E5%B9%B3%E4%B8%8E%E6%97%B6%E4%BB%A3/>。
- 新加坡國立大學圖書館 2008「吳振強(Ng Chin Keong)」新加坡國立大學圖書館海外華人研究ウェブサイト, http://www.lib.nus.edu.sg/chz/chineseoverseas/oc_wzq.html。
- 希達 1963「印尼新文學史綱」『南洋文摘』4(1), 57-64。
- 柳夢 1964「戰後馬來文」『南洋文摘』5(9), 68-70。
- 楊貴誼 2006『楊貴誼回憶錄: 膠童与詞典』Kuala Lumpur: 南大教育与研究基金會。
- 1961「從馬來語到印尼語」『南洋商報』1961年10月29日。
- 威北華 1954「談馬華字典的編輯」魯白野(周星衢基金編注), 2019『馬來散記』Singapore: 周星衢基金, 346-348。
- 1955「晚会」威北華(張景雲編), 2016『威北華文芸創作集』Petaling Jaya: 有人出版社, 316-322。
- 威北華(張景雲編) 2016『威北華文芸創作集』Petaling Jaya: 有人出版社。
- 張少軍 1961「馬文學講座」『南洋文摘』2(6), 62-73。
- 周南京主編 1995『世界華僑華人詞典』Hong Kong, Singapore, Johor Bahru: 智力出版社(原由北京大學出版社出版, 1991)。
- 周維介 2014「星滿蒼穹: 半世紀前新加坡的馬來文天空——從“英語是新加坡的國語”說起」『怡和世紀』22, 48-54。
- 周星衢基金編著 2016『致讀者——新加坡書店故事 1881-2016』Singapore: 周星衢基金。
- 莊華興 2002「南大學者在馬來語文發展上所扮演的角色」『南大資訊』6(2002年12月), http://nantah.org.my/index.php?option=com_content&view=article&id=92。